

それでは、なぜ、渋沢は「家」よりも「個」の立場で事業に取り組むことを重視したのでしょうか。それは、多様な人と手を組んでネットワークを広げるためだと考えられます。非財閥であることが、自由に人的ネットワークを作れる環境そのものだつたということになります。

国民経済のインフラとして欠かせ

たということがあります。

特定の家系でつなぐ「家」を作らない事業承継を果たしました。そのため、渋沢は「家」の制約がなく、自分の興味ある事業や重要と感じる事業を「個」の立場で取り組んでいきました。

他方、渋沢は、二代目、三代目と特定の家系でつなぐ「家」を作らない事業承継を果たしました。そのため、たとえば三井は、財閥の本社に当たる社員総会を三井「家」のみで行いました。同様に、三菱でも、やはり財閥のトップには岩崎「家」がいる構造でした。その「家」は、二代目、三代目と特定の家系で事業承継を果たしていきます。そのため、財閥のトップは、教育、福祉、政治などいろいろやりたい事業があつても、あくまで「家」を代表して、事業展開しなければなりませんでした。

設立しますが、最終的には財閥本社の意向が重視されることが常でした。たとえば三井は、財閥の本社に当たる社員総会を三井「家」のみで行いました。同様に、三菱でも、やはり財閥のトップには岩崎「家」がいる構造でした。その「家」は、二代目、三代目に特定の家系で事業承継を果たしていきます。そのため、財閥のトップは、教育、福祉、政治などいろいろやりたい事業があつても、あくまで「家」を代表して、事業展開しなければなりませんでした。

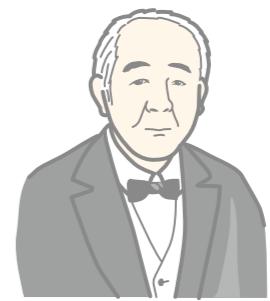
渋沢は次のように語っています。「いかに自分が苦労して築いた富だ、といつたところで、その富が自分一人のものだと思うのは、大きな間違いなのだ。要するに、人はただ一人では何もできない存在だ。国家社会の助けがあって、初めて自分でも利益が上げられ、安全に生きていくことができ。もし国家社会がなかつたら、誰も満足にこの世の中できていくことなど不可能だろう。(中略)高い道徳を持った人間は、自分が立ちたいと思ったら、まず他人を立たせてやり、自分が手に入れたいと思つたら、まず人に得させてやる。」

歴史は、今を経営する者がより良い事業を展開するため、先人が遺してくれた経営の鑑かがみでもあります。

令和時代の紙幣肖像画に選ばれた渋沢栄一(以下「渋沢」といいます)は、国民経済のインフラとして欠かせない企業を次から次へと起業する「シリアル・アントレプレナー」(連續起業家の道を追求した経営者であることを、月報7月号・8月号で紹介いたしました)。

# 歴史は形を変えて繰り返す! 歴史(戦略)に学ぶ企業経営

## 令和時代に渋沢栄一から学ぶ<sup>その1</sup> 「企業は一体誰のモノなのか?」



### 1 渋沢の「個」と財閥の「家」

その渋沢の生きた明治から大正にかけて日本は、近代資本主義社会へと急速に進化していきました。その

### 次月号(その2)

4 実業界からの引退

1 渋沢の「個」と財閥の「家」  
2 人的ネットワークの構築  
3 公益の追求  
5 公私的好循環  
6 繼続は力なり



### 弁護士 曽我康久 氏

●プロフィール(ソガ ヤスヒサ)  
「かなくち経営法律事務所」所属  
事業承継ブロックコーディネーター  
大学及び大学院において、法律学  
にのみならず経済学の視点から会社  
法、独占禁止法及び下請法を研究。  
その観点から中小企業支援に注力し  
ている。

過程で、財閥は勢力を拡大し、ビジネス界だけでなく、社会全体に多大な影響を持つことになりました。もっとも、財閥の事業展開は、あくまでも金融、重工業が中心でした。他方、渋沢による事業展開は、同時期の財閥が行った事業展開と比較すると相当な違いがあります。その違いが生じた要因は、渋沢は「個」を重視したのに対し、財閥は「家」を重視したことになります。すなわち、財閥も渋沢同様に多くの子会社を

令和時代の紙幣肖像画に選ばれた渋沢栄一(以下「渋沢」といいます)は、国民経済のインフラとして欠かせない企業を次から次へと起業する「シリアル・アントレプレナー」(連續起業家の道を追求した経営者であることを、月報7月号・8月号で紹介いたしました)。

その渋沢の生きた明治から大正にかけて日本は、近代資本主義社会へと急速に進化していきました。その